国際経営学会主催　公開講演会

『ようこそ!!先輩　経営学部の卒業生から仕事の現場を学ぶ・5』開催報告

泉水　英計

経営学部の卒業生だというお洒落な出立ちの若者が、後輩に向けた講演の相談に現れたのは初夏であった。研究所ではこれまでも、卒業生を招いて社会での活躍ぶりを紹介してもらう企画をおこなってきたが、卒業生の方から開催を申し込んでくるというのは初めてだ。自己紹介をうかがって、彼の話は在校生に響くと即座に直感した。

武田段さんはシンガポール在住のフラワーアーティスト。生花を仕入れ、独自のアレンジで店舗やパーティ会場に文字通り「花を添える」のが仕事だ。訳せば華道家となろうが、特定の流派とは関係なく、それだけ自由にクリエイティブに、しかし、それゆえに組織による収入の保障なしに仕事をしている。また、シンガポールには、経済的混迷が続く日本よりも大きなビジネスチャンスがあるものの、外国人という立場でのビジネスには、政府の規制や監視、あるいは従業員との文化的ギャップの克服といった点で厳しい条件が課されている。

これらの困難を克服し、〈DAN TAKEDA FLOWER & DESIGN PTE. LTD.〉を拡大した武田さんは、どのような半生を歩んできたのだろうか。意外なことに、彼は地味な学生生活を送っていたらしい。自身の言によれば、勉強でもスポーツや他の分野でも秀でたものはなく、適当にアルバイトなど

しながら経営学部を2003年に卒業、一般企業に就職した。転機は人員整理による解雇にあったという。20代半ばで突然に収入源を失い、雇用者への恨みは大きかったが、それならば本当に自分の好きなことをお金にしようと一念奮起、生花店へと転職した。ネガティブな感情を切り替える潔さがピンチをチャンスに変えた。

知人からの情報だけを頼りに2008年に渡航、すぐに挫折して帰国を考えたが何とか踏みとどまった。学生時代に英語は得意でなかったというのは謙遜ではなさそうだ。小口の顧客から始めるのではなく、ルイ・ヴィトンやシャネル、カルティエといった一流ブランドへの営業に果敢に挑んだのも彼の潔さであろう。険しい道ではあるが、そのような層で実績が得られれば、評価は一気に上昇する。コシノヒロコ氏とのコラボレーションや高島屋カレンダーの画像作品提供といった大きな仕事に繋がり、コニカミノルタの企画で、アジアで活躍する日本人に選ばれ、武田氏の肖像を側面いっぱいに写したバスやタクシーが走った。

講演会場の1号館250教室には300人以上の学生が集った。自分と正直に向き合ってフラワーアートという道を切り開き、物怖じせず、かといって自惚れず、ビジネスに邁進する先輩の話に聴き入っていた。